三越時代の非水
―『みつこしタイムス』にみる、やまと絵の意匠―

山口 希　（國學院大學）

杉浦非水（1876－1965）は、明治から昭和初期にかけて、日本のグラフィックデザイナーの先駆けとして活躍をした図案家である。今回の発表では、三越のイメージ戦略の過渡期である 1909 年から 1914 年に制作された PR 誌『みつこしタイムス』の表紙を対象に、その変遷と非水のやまと絵の意匠の試行過程を検討する。

『みつこしタイムス』は、三越が広告活動の核として刊行していた小冊子の 1 つで、1908 年より発行を開始した。1909 年以降、非水も図案制作に参加している。三越の営業方針である「学俗協同」を一層反映し、文芸雑誌としての質も伴った『三越』が 1911 年に刊行された影響を受け、その後、1914 年に廃刊となる。

三越は約 4 年もの期間、『みつこしタイムス』と『三越』を異なる特徴の小冊子として制作し、刊行を継続した。非水が手がけていた両雑誌の表紙にもその意図が現れており、よりモダンな主題の採用と図形的かつ平面的な描かれ方がされている『三越』に対して『みつこしタイムス』は、やまと絵の意匠を試行した表紙が多くみられた。中でも、当時西欧の鑑賞家より見出され、国内でも呉服の図案として持てはやされていたと語られている尾形光琳の存在は、表紙からも明確にうかがうことができる。

非水が三越の嘱託勤務を開始した 1908 年は、日本広告の伝統面とあらたな西洋広告とが交わる広告・商業美術の黎明期に当たる。そしてそれは、日本の広告界の最先端を走る三越にとっても、新たな流行やイメージ構築を目指し和洋折衷を試みた時期であった。現在、非水に関する図案研究は、西洋の世紀末美術からの学習に論点を置いたものが大半を占めている。しかし、上記のような時代に頭角を現した非水の図案家としての功績を論じるには、1905 年頃より三越が積極的に仕掛けていた江戸趣味から流行を生み出す企画においてグラフィックデザインの一端を担っていた非水が、どのような形で図案を制作していたのかについての検討が必要不可欠であり、そこからうかがえるやまと絵研究の成果にも言及をするべきであると発表者は考える。

また、非水の三越への勤務が決まった要因の一つには、当時最もモダンな印刷技術であった石版カラー印刷に精通していた点があったと発表者は推測する。彫師、摺師を介すことなく、自らの作品の筆致をそのまま印刷することのできる石版印刷は、その新しさ故に印刷工程を把握し制作を行う技術を持つ者がごく限られていた。石版印刷に関わる図案家の手腕は、配色やレタリングといった印刷美術特有の要素にも発揮されており、非水も例外ではない。今発表は、非水のやまと絵研究の成果に加え、印刷技術者としての非水にも注目し、その特徴を明らかにすることで一層の杉浦非水に関する研究の進展を目指すものである。